編集のことば

羊土社より2019年に「大腸内視鏡診断の基本とコツ」，2020年に「大腸EMR・ESDの基本とコツ」（ともに監修 田中信治先生，編集 永田信二先生・岡 志郎先生）が発刊され，大好評を博した．次は上部消化管ということで，2022年に「食道・胃・十二指腸ESDの基本とコツ」（監修 小野裕之先生，編集 上堂文也先生・小田一郎先生・矢野友規先生・滝沢）を発刊していただいた．

そして今回，「基本とコツ」シリーズの締めくくりとして“上部内視鏡診断の本”の企画をいただいた．診断といえばこのお二人ということで，2015年に新潟ではじめてお会いした際（写真）に衝撃を受けた市原先生と濱本先生に編集者として加わっていただいた．さらに内視鏡診断の知識と情熱がものすごい北海道内の新進気鋭バリバリの先生方にご執筆をお願いし，知識と技術を惜しみなく披露していただいた．

診断の本はともすれば堅苦しく難しい内容になってしまう場合もあるが，本書では写真やイラストをふんだんに織り交ぜることにより，文字で読んだことをすぐ具体的にイメージしやすく，教科書というよりは読むのが楽しく臨床ですぐに役に立つ実践書となっている．また，本書の最も大きな特徴としては，これまでのシリーズと同様に，事前に全国の内視鏡医に日頃の疑問を募集し，それらについて詳しく回答されており，「今さら聞けない…」「実際のところどうなの？」「エキスパートはどうしているの？」など，あまりこれまでの成書には記載されてこなかった内容にも深く踏み込んでいる．

以上のように本書は「上部消化管内視鏡診断の新しいバイブル」として，初学者からエキスパートまで，ぜひ一度通読していただきたい素晴らしい本になったと確信している．トレーニング中の若い先生はもちろん，中堅や上級の先生にも知識の補強にお役立ちできればこのうえない喜びである．

最後に非常にお忙しい中，執筆をお引き受けいただいた先生方とこのような機会を与えていただいた鈴木美奈子様，中田志保子様をはじめとする羊土社の関係者の皆様方に厚く御礼申し上げる次第である．

↑2015年4月 新潟にて
左：濱本先生，中央：市原先生，右：滝沢

2023年3月

交雄会新さっぽろ病院　内視鏡センター長
滝沢耕平

編集のことば

2021年末，滝沢先生から書籍編集のお声かけをいただいた．

ついにそんな年代になったかと感慨深くなりつつも，ワクワクしながら「自分が後期研修医だったら手に取って買う教科書って何だろう」と思いを馳せた．私の故郷，北海道は広大な土地柄から，研究会・学会参加などのハードルがきわめて高い地域があり，教材へのアクセスが容易ではないことはしばしばである．一緒に働き，指導もした後輩達は北海道内をはじめとした全国津々浦々に散らばり，各地域で時々悩みながら診療しているようだ．どこの医局・チームでもありふれた光景だろうが，若手の先生，後期研修中の先生方は今もときどき悩みつつ内視鏡を握っていることだろう．

ふと，自分の過去を思い返してみた．後期研修の頃も出張先で1人だったときも，上司たちに電話ですぐ相談できたからなんとか乗り切れたシーンもあった．遠くからでも背中を押したり，STOPをかけてくれたり，解決の道筋をつけてくれたことが嬉しく，頼もしかった．上司の助言を頼りに，ときに薄氷を踏むような思いで乗り越えた状況も幾度となくあった．

しかし，いつでも誰かと相談できる環境にいる研修医ばかりではないだろう．

自分だったら，そんなときも寄りどころとなる本があれば手にとっただろうし，嬉しく読みふけっただろう．そんな細かなところに手がとどく本になるように，何が不安でわからないのか全国から質問を集め，各項目にCQとしてちりばめられているのも，この本の特徴である．答えのない問いにも向き合ったつもりであり，ぜひご一読いただきたい．

読後に「頑張れるかも！」とちょっと自信がつく手助けができたらいいなぁ，それがこの本に私が掛ける思いであり，編者・著者陣の共通の思いであろう．苦悩してきたベテラン医師，著者陣の軌跡を眺め，読者の診療が少しでもレベルアップできたら望外の喜びである．

2023年3月

仙台厚生病院 消化器内科
濱本英剛

編集のことば

公益を意識した文章を世に出すにあたっては，書いたものからどれだけ「自分」を消すか，というのが1つのキーポイントかもしれません．かつての新聞記者は，入社して最初に「感想文を書くな．自分を出すな」と習ったそうです．パブリックに発信する記事内に「個人の感想」はジャマなのでしょうね．

医学論文や成書にも同様のことがいえます．例えば，論文には考察という欄がありますが，考える・察するという字面を真に受けて自由に連想したものをつらつら書いてしまうとrejectを食らいます．学術ではエビデンスこそが重要．「自分」を出してはいけません．

ただし…….

学術文献が「自分」を排除する一方，実臨床における疑問はいつだって，「自分」に近いところからスタートします．

医師は，臨床のど真ん中で，目の前の患者や手の中のデバイスから湧き出る，その場限りの疑問と戦わなければいけません．現場依存的で，ニュアンスまみれで，成書の索引やMeSH termとして用いられる硬い学術用語では表しきれない，ゆるくて曖昧で，狭く深いクエスチョン．得てして，教科書のどこを引いたらいいかわからないし，ググろうにも何という単語で検索すればいいのか見当が付かない．これこそが，「クリニカル・クエスチョン（CQ）」です．

「自分」から湧き出た疑問を，硬く均したエビデンスで解決することはときに困難です．しかし，そこをめざしたのが本書であります．けっこうがんばりました．前線の医師から個別に浮かび上がってくるCQをできるだけ多く集めて，1つ1つに個別具体的なエビデンスで立ち向かう．北海道で活躍する著者たちが，硬くなりすぎず，かつフランクにもなりすぎないギリギリのラインで回答を試みました．いい本になったと思います．

文章からにじみ出る，著者の方々の「自分」にもご着目ください．エビデンスを丁寧に積み上げているところの脇の辺りに，ナラティブがいい感じでちりばめられていますので．

2023年3月

JA北海道厚生連札幌厚生病院 病理診断科
市原　真